第49号 崋山会報
令和4年11月11日
公益財団法人崋山会

# 売立目録を繙（ひもと）いてみよう ― 未知の美術品との出会い ―

四国大学文学部日本文学科教授 須藤茂樹

筆者は、現在四国大学文学部日本文学科に所属し、日本史と博物館学芸員養成の科目を担当しているが、十数年前は徳島市立徳島城博物館の学芸員として、蜂須賀家と徳島藩を中心に近世の歴史や美術に関して、調査研究・展示公開などに関係してきた。

二〇〇四年の秋に信濃（長野県）出身で徳島藩の御用絵師に召し抱えられた鈴木芙蓉の生涯とその作品、交友関係を明らかにした「忘れられた文人画家　鈴木芙蓉とその周辺」展を開催したが、その際に田原市博物館所蔵の重要文化財の椿椿山筆「小集図録及び書簡」などともに、重要美術品の渡辺崋山筆「牡丹図」を借用、展示させていただいた。本図作成の背景が興味深い。蛮社の獄後、在所蟄居の判決を受けた崋山は、田原の地で幽囚の日々を送る身となった。崋山の画弟子福田半香等は、江戸で崋山の絵を売り、その収入によって恩師の生計を救おうと考えた。この図は、その半香の義会の求めに応じて描いたもので、天保十二年（一八四一）に描かれ、評判となり、「罪人身を慎まず」との世評を呼び、田原藩主三宅康直に災いが及ぶことを恐れた崋山はついに死を決意することになった。本作品は、後に「腹切り牡丹」と称されたといい、私の二十二年の学芸員生活で思い出に残る一点であることは間違いない。

ところで、近世大名の美術を調べる手法のひとつに戦前の売立目録をめくるというのがある。江戸時代の大名は新しい明治の世を迎えた時と激動の戦争の時代を経て戦後爵位を失った時に、美術品を手放さざるを得なくなる。大名美術の精華が見られる名古屋の徳川美術館などは稀有な事例で、二十五万七千石の外様大名阿波蜂須賀家もまた幾度となく売却を行っている。そのなかで、昭和八年（一九三三）東京美術倶楽部で行われた蜂須賀家伝来品の売立目録である『侯爵蜂須賀家御蔵品入札目録』には、国宝の雪舟筆「水色巒光図」（現奈良国立博物館所蔵）、重要文化財の「西行物語絵巻」（現文化庁蔵）、重要文化財の尾形光琳作「子日蒔絵棚」（現東京国立博物館蔵）など名品揃いである。重要文化財の伝岩佐又兵衛筆「豊国祭礼図屏風」（徳川美術館所蔵）が蜂須賀家の旧蔵であったことを知る人は少ない。また、たまに値段表が付属している場合があり、「侯爵蜂須賀家御蔵品入札高値表」によれば、「西行物語絵巻」は十三万九千五百円で落札されている。いまの価値に換算すると五億円以上だろうか。

実は、この目録のなかには、藤田東湖賛、渡辺崋山筆の「蘭菊図」が掲載され、六百八十円で落札されている。美術愛好家のみなさん、展覧会の図録とともに、売立目録をめくってみよう。この作品が元はここにあったんだとか、新たな未知なる作品に出会えるかもしれない。もちろん崋山の作品にも…。

蜂須賀家売立目録

渡辺崋山筆蘭菊図

# 『全楽堂記伝』（八）

## ―崋山伝記の根底テキスト―

研究会員　別所興一

### 申渡之書（江戸町奉行所の判決）の概要と発令前後の事情

崋山は天保十年（一八三九）五月十四日に江戸北町奉行所で吟味を受けるに到ったが、その際に家宅捜索に従事した役人によれば、一藩の家老で有名画家でもあるから、きっと家は富み栄え、衣服器材は豊富であろうと予想したのに見当たらないので、どこかに隠しているのではと家人を問責したところ、質札を出して説明したので、ようやく納得して崋山の清官ぶりに感嘆したという。

また入獄した崋山が、当初秘かに語ったことによれば、「人に示さぬ書藁の為に誹謗の罪を得んは残念なる事なり。免ことも冤死すべき者ならば、事に猶可議事共を血書して上りて死刑を待んとも思ひけれども、君の事、老母の事を思ひ出でて、止りぬ」という次第だった。つまり国家の前途を憂いて書いた断簡で誰にも見せない原稿なのに幕政批判の罪をなすり付けられるのは残念至極である。この私を無実の罪でも死罪にすべき者というなら、私は自分の潔白を証明するため、さらに審議すべきことを自分の血で書きつけて上呈し、死刑になる道も考えたけれど、それは主君や老母に災禍を及ぼすことから断念した、という訳である。

さらに崋山が語ったことは、明日の呼び出しで死刑判決が下ると聞いた時に、「梓弓やたけ心之武士も親にひかれてまよふ死出かな」という歌を詠み、町奉行に老母の生活に不安なきよう依頼したという。

そして同年十二月十九日付けで次の要旨の「申渡之書」が下された。

「慎機論並海外事情尋を請答の趣に書物を綴り有之、内には井蛙鷦鷯、或は盲瞽想像等、其外比喩の語を以御政事を批判致し候段、畢竟海外の御手当薄く候ては、不慮の儀有之候ては国家の御為に不相成候と、一途に存過候心底より、自問自答の心得にて、右の通認置候得共、不計も不容易の文勢の流に心付、恐入の儀を相弁、未稿終り不申下書の儘にて仕舞置、他見為致候義更に無之由は申立候得共、右始末「不憚公儀不敬之至」重役を相勤候身分別て不届に付、主人家来へ引渡、於在所蟄居」という内容だった。

当初の逮捕理由とは大きく異なり、崋山の口述をかなり正確に取り入れているものの、公儀を憚らぬ不敬な幕政批判を有罪の決め手にしていることが分る。幕府目付の鳥居耀蔵らは、崋山を蘭学者一派の元締めと目し、林家の儒学を精神的支柱とする幕藩体制を脅かす危険人物として逮捕し、極刑（死罪）にする心算だったが、儒学の師匠松崎慊堂の赦免嘆願書を無視できず、罪一等を減じて在所蟄居を申し付けたようだ。

翌十一年一月に崋山は罪人籠で田原へ護送され、池ノ原の地で家族と共に蟄居生活をすることになった。

## 目次


題字「崋山会報」元崋山会理事　故小澤耕一氏

P① 売立目録を繙いてみよう ―未知の美術品との出会い― 須藤茂樹

P② 全楽堂記伝（八）別所興一

P⑥ 田原市博物館の30年 増山禎之

P⑩ 博物館所蔵品から 渡辺崋山筆『客坐掌記（天保九年）』⑭

P⑫「偉人物語　渡辺崋山」読書感想文について

P⑯ 公益財団法人崋山会 田原市博物館からご案内

## 田原池ノ原の幽居生活の心境

その幽居生活初期の心境を、崋山は二首の七言律詩で表現している。

濤声澎湃繞孤城　海国喧寒陰又晴
畏湿蝶衣困露葉　乗乾蛛網撒簷楹
樊禽何学豊干舌　池水恰如魏野清
三歳一経営楽地　寂寥宜以送余生

海原の波濤の盛んな音が、田原城を取り巻いている。海に囲まれた我が藩は、暑さ寒さ、晴曇りと移り変わる日常だ。湿気を恐れる蝶（市井の民か）は、葉に溜まった露にも困惑し、蜘蛛（官憲の役人か）は乾きに乗じて、すべての軒や柱に網を張りめぐらしている。籠の中の鳥のような今の私には、どうして唐代の禅僧・豊干の弁舌を学ぶことができようか。

でも、わが家の近くの池の水は、自らの草堂で悠々自適の生活をおくった宋代の詩人・魏野の親しんだ池水と同じように清らかである。私はこの地で三年過ごしたが、安楽の地にするよう努めている。寂寥感はぬぐえないものの、余生をつつがなく過ごしたいと思う。

復嶺重雲絶友期　中襟欝塞有誰知
一花零落豈無数　百鳥和鳴如感時
送蕨隣翁愛幽独　折花野老慰愁眉
櫟才雖没驚人句　満胸隠憂杜老詩

山々や重たい雲が覆いかぶさり、友との交際も断絶している。私の胸の内は鬱屈閉塞しているが、いったいそれを誰が知っていよう。このように花が枯れ落ちる光景は、数えきれないほどあるだろう。

でも、たくさんの鳥が和して鳴いており、時世に順応しているようだ。蕨を届けてくれた隣家の老人は、静かな一人住まいを愛惜している。花を折る田舎老人の私も、胸の憂いをなだめている。私のような無能な者は、人を驚嘆させるような詩句を持たないけれど、わが胸の奥は憂いを秘めた杜甫の詩句で満ちている。

以上、崋山の七言律詩を筆者の自己流の解釈で紹介させていただいた。当時の崋山の漢詩は、晩年の画作「千山万水図」「虫魚詩画冊」のように自分の思いや考察をストレートに表現せず、「暗喩（隠喩法）」の形式を採用している。そのために多種多様な解釈が可能である。いずれにしても、崋山は厳しい言論統制の中で、時世（鎖国・幕藩体制）への抵抗と同調の両極の間を揺れ動いていたと言えよう。

その証拠として、この律詩を書いた後の生活のようすにつき、次のような記事が見られる。

「蟄居せる憂念なきにしもあらざれども守困謹慎殊に厳にして、又天を安じて自ら随安居士と号し、書を読み、画を描き自適せり。殊に老母に奉養し、妻子と常に団欒して楽しみ、憂なき者の如し」

崋山が号を随安居士と改めた事は、天命に随って落ち着いた生活をしたいという心意気を示すと言えよう。

蛮社の獄以前の崋山は、「論語」などの儒学の古典を学び、「修身斉家治国平天下」の道徳を体得することを主眼としつつも、西欧列強の対日接近に直面して、新たに蘭学を学ぶ必要性を痛感した。同志を集め広めて日本国の将来に貢献しようと意欲を燃やした矢先に、禁獄の身となり、在所蟄居を申し付けられた。

恩師の松崎慊堂の忠告に従い、以後は蘭学（西洋学）への接近を自らに禁じ、儒学に専念しようと考えたが、物足りなさを感じていた。そんな時めぐり会った『易経』について、崋山は次のように記している。

「幽居のうち、喜んで易を読みいへらく。六経の中、一字の亨通をせざることなきものは、惟其れ易乎。其他の諸経は時処位の三の者ありて、其中正に随たるものなれば、学者公平にして深く思ひ、博聞にして約に取るあらざれば、拘束あることを免がれずとて、易に於て頗る発明する処あり」

幽居において『易経』を読んだ結果、言ったことは、六種類の経書（易

経・詩経・書経・春秋・礼記・楽経）の中で、一字の不調もなく一貫しているのは易経だけである。その他の諸経では「時間と場所と地位」の三条件に左右され、中立公正であっても、それぞれの学者が真に公平かどうか深く考え込むことになる。

たくさんの知識があるだけに簡略化が難しく、小さいことに拘泥したりする。それに対して易経では、そんな事がないので、たいへん啓発されることが多い、という訳である。

易経はそれまで非合理で迷信的な傾向があるとして否定的に評価されていたが、儒学に見られない宇宙論を内包し、自然と人生の変化の道理をシンプルに解説する易経に、崋山は魅力を感じていたようである。

また、同じ観点から「論語」、特に「郷党篇」を読み直したところ、その文章は聖人の孔子や門人たちの言行をありのままに写したものであることがわかった。その写実の内容は味わい深く、他書の写実はとても及ばないと力説している。

さらに、写実のすばらしさに感動した崋山は、次のように新たな絵画観を感得するに到った。

**「何となれば余山水を見て真景写し、動植を看て其形容を摸したるは、忽卒の間になすところにても、夫を他日浄写せんに、真を見て描きたるときの如き真物のをもむきは得られぬなりといへり。幽居してより絵画の事大に発明する処あり、自得する事多し」**

私が山水の風景や動植物を実地に見てありのままに描いた絵は、短時間に仕上げたものでも、それを後日思い出して清書した絵と比べると、原物の写実の風趣にはとても及ばないことがわかったと言っている。さらに幽居生活をするようになってから、画作について大いに発明・発見し、自得することが多かったと語っている。

その直後に、**「読書絵事の論説等の箚記散在せり。他日輯むべし」**と書き添えている。幽居生活での読書や画作についての感想・覚書があちこちに散らばっているので、後日編集したいと将来構想を表明している。当時の崋山は、藩政や幕政に関与することはできないけれども、この地で画家として大成する願望を深めていたことが知られる。過ぎ去った筆禍事件については、当時詠んだ短歌で次のように総括している。

**こりつ（樵り集）みてよ（世）をすみかま（炭竈）のけむたきはおのがたきさふ（焚添）たきぎ（薪）なりけり**

崋山が自決した辛丑の年、天保十二年（一八四一）に自ら一日の行動規範を定めた。すなわち、夜は午前〇時前後に就寝し、朝は日の出前の午前四時前後に起床する（睡眠時間は六時間）を基本とする。惰眠を削減して精進努力する日課で大切なのは、夜と朝の過ごし方である、と指摘している。

この年の元日のようすについては、次のように記している。

**「辛丑元日、早起自汲盥。拝家庙、進辛盤、献寿盃、賀慈親。々々栄壽七十、余四十九、婦三十六、児立十、諧七、女葛十六、闔家無故、誠天楽也」**

元日の朝は、早く起きて自ら盥に水を汲んで顔を洗い、一家の先祖の御霊屋を拝し、五臓の気を通じ健康を保つために五辛盤（辛味や臭味の強い五種の野菜を盛った盤）を進呈し献杯して、慈愛に満ちた母親に年賀の挨拶をする。

母親の栄の年齢は七十、私は四十九、妻たかは三十六、長男立は十、次男諧は七、長女可津は十六（いずれも数え年）である。一家はみんな事故なく、まことに天道にかなった安楽な生活をしている次第である。

この日に詠んだ二首の七言絶句は、次の通りである。

**万甍烟裏海暾紅　投刺飛轎西又東**
**滾々馬塵皆酔夢　今朝真箇迎春風**

多くの家並みから竈の煙が立ち上り、裏海の朝日は紅に染まっている。江戸にいたころは年賀の挨拶廻り

で、西へ東へと名刺を配り駕籠を飛ばしていた。馬の土煙が一面に立ち込め、町の人々は夢に酔いしれていた。でも、田原の幽居にある今朝は、真の春風を迎えたように希望があふれ、充実した思いである。

四十九年官道樗　昨非不改恥衛遽
只知有楽超人処　七十萱堂数架書

四十九年の宮仕えを振り返ると、無用の長物のような存在だった。昔日の非行をきちんと改めない点で、蘧伯玉（春秋時代、衛国の家臣。年五十にして四十九年の非を知った賢太夫の称あり）に対して恥ずかしい。しかし、今の私は人知を超える処に楽しみがあることが分った。私のかたわらには七十歳の母親がおり、私の書架には今後読むべき数冊の本が備わっているからだ。

これら元日の手記を見る限り、崋山がこの年の十月に自決する気配は、まったく感じられない。むしろ自分の余生に大いなる希望・構想を持っていたことが知られる。それにも関わらず、崋山はどうして自死を決意せざるを得ない破目に陥ったのであろうか。

そのあたりの事情の一端を伝える記事が、二首の詩の後に見られる。

「自ら常に憂ふるは、世人の伯登は罪なし。全く讒訴を聴ける人々不明より出しなり。或は伯登の言へりしことは、皆天下の為の篤論なりなどと言ひあへるは、却て又禍を招く媒とならんことあるべし。

猶此上に罪の名を付られては、君親に及すことのあるべしとて、己が令聞広誉をもとめては毎に恐懼せし。又不幸にして殊死ともなるべき身の、天の寵霊と県官君家の渥恩にて斯る間居の人となり、慈母妻子と共に余生を送ることを得ば、誠に難有事共など丶常に感じき」

私が常に憂慮するのは、世の人々が崋山は無罪である、まったくの讒言による訴えを聴いた人々（老中水野忠邦ら）の不明、識見のなさから、事件が起こった、という風説が広がる事である。あるいは崋山の言説はすべて天下国家のためを思った行き届いた論説であると語り合ったりすることは、却って災禍を招く媒介となる恐れがあるであろう。

なお、この上に新たな罪状を付け加えられると、主君や親類にも迷惑が及ぶだろうと考え、自分のよい評判が広まることを求めながらも、いつもそれを恐れていた。それ故、不幸にして死罪にもなる身でありながら、天の恵み、ご公儀の役人や藩主らの厚い恩恵のおかげでこのように閑居（世事を離れてのんびり暮らす）の身となり、母上や妻子と共に余生を送ることができるのだから、誠に有難いことといつも感謝している、と述べていたという。

崋山は自分のかつての政治論説の正当性が、世の人々に広まることを願いつつも、それが新たな災禍を招くことを恐れていた。崋山を断罪したご公儀の役人の責任が問われ、為政者としての権威の失墜につながるからである。それ故、ご公儀の役人や藩主らが旧態依然として自説を修正しない以上、生殺与奪の権限を持つ彼らの機嫌を忖度し、その恩義を力説しなければ、自分の一家は存続できないことを思い知ったのであろうか。その真意を測りかねる。

「天保十二年辛丑歳十月十一日、自殺して死しぬ。其様を後に見るに、腹を一文字に腑膜（はらわた）の見ゆるまでに引きまはして、衣襟の前を合せ、喉を項（首すじ）までさし貫き、其脇差は傍に捨置たる体にて、右の方へ伏しかゝりたり。誠に暫時の間の事なれども、従容としたる業にやとをもはる」

この自刃のありさまを、ラスト・サムライにふさわしい美しい最期と評する見方もあるが、筆者は何よりも人間的な誠実さを重んじた崋山を、そこまで追いつめた徳川日本の〝闇の深さ〟を思わずにはいられない。死ぬこと以外の道を途絶した為政者の責任をこそ、後続世代は再考すべきではなかろうか。

# 田原市博物館の30年

田原市博物館長
増山 禎之

田原市博物館の前庭に立ち、壮大な屋根を見上げると万感の想いがある。それは明治時代からふるさとの文化を守り伝えてきた人たちの積み重ねが瓦の重なりとだぶったからである。また、この施設の建設・運営にあたって、様々な人が関わり、その思いが詰まった施設でもあるからだ。

しかしながら、その経緯を知る関係者も鬼籍に入った人たちもおられ、現役職員でも私が最後の人間となった。来年、開館30年を迎えるに当り、これまでを振り返りそれを伝えることも意義があると考えている。

## 1、田原市博物館のなりたち

田原市博物館の前身のひとつに戦前の中部尋常小学校の郷土資料展示室がある。当時の校長、伊奈森太郎は先駆的な郷土教育を進め、その教材として多くの郷土資料が学校に集められた。そこには城宝寺の墓所、幽居跡とともに渡辺崋山研究のために学校に研究者が訪れていた。

崋山研究の碩学である小澤耕一先生は歴史学を専門に学んだわけではなく、当時勤めていた中部小学校の郷土資料の管理担当を任され、見学に訪れる人の対応をするため自ずと崋山の勉強せざるを得なかった、と語っていた。それが、偉大な研究者を生むきっかけとは、世の中分からないものである。市博物館には中部小学校の管理ラベルが貼られた田原藩・崋山資料が引き継がれている。

崋山顕彰の機運が高まり、多くの人の寄付により、崋山の遺品を管理するため昭和九（一九三四）年、田原城二ノ丸櫓跡に崋山文庫が建設された。地元ではじめての専用の展示収蔵施設である。昭和30（一九五五）年は、町村合併とともに渡辺崋山関係資料が重要文化財に指定され、また崋山顕彰のため、池ノ原公園の整備、城宝寺霊牌堂の建設などが行われた。明治24年の頌徳碑（田原城二の丸）の建立、明治43年の崋山会の設立からこの年まで崋山顕彰の大事業が行われた時期である。

昭和33年それらを保存公開する施設として文化財収蔵庫（二ノ丸櫓）が開館した。これは、崋山資料及び同時に国史跡吉胡貝塚出土品を保管・展示するための施設でもあった。その場にあった崋山文庫は移築、田原藩の古文書・蔵書も収蔵され、閲覧など研究の場となった。このふたつの施設をあわせ郷土博物館として運営がはじまった。

二ノ丸櫓跡に建つ崋山文庫

しかし、多くの作品を一堂に展示をするには手狭であり、展示は近接した中部小学校を会場とした。

昭和42（一九六七）年4月に田原町の中央公民館施設の役割を持つ、崋山会館が開館し、翌43年には崋山会主催で「崋山の生涯と絵画展」が開催された。この展覧会で初めて田原市の公共施設での展覧会が実現したのであった。また、崋山会館の展示室では、専用の展示ケースに作品が収められ、常設で見学可能となったわけである。

崋山会館の展示室

昭和47年、「崋山130年祭　記念遺墨展」がこの崋山会館で催された。200点を越える町民待望の大展覧会であった。

昭和58（一九八三）年11月に地域文化広場内に田原町の歴史を辿る郷土資料展示室が整備された。

昭和60年、合併30周年事業『現代に生きる崋山名作展』が開催された。この展示では国宝「鷹見泉石像」をはじめ重要文化財9件、重要美術品11件が全国各地から集められた前代未聞の展覧会であった。借用品は田原文化会館、それ以外は崋山会館で展示を行った。国の文化財級の展示を開催するにあたって十分でない展示会場の保存環境を克服するための経験が、田原町博物館の展示・収蔵庫環境整備に生かされていく。

昭和63年、崋山会館の改修工事に伴い、常設の崋山の資料は田原文化会館展示室に移動し、崋山コーナーとして展示され田原博物館として運営されていった。

## 2、田原町博物館建設へ

昭和61（一九八六）年度に田原町文教地区及び博物館整備調査委員会「田原町文教地区及び博物館に関する答申」によって、博物館の建設場所とその性格の3案が示された。そこで1、総合博物館・2、美術博物館・3、崋山記念館の3案が検討された。1は崋山、歴史、民俗、考古のすべての要素を同一館内において保存、運営するもので、2は、美術博物館で、

崋山文庫（展示室）を独立させ、同一敷地内で他の要素と別棟に配置するもの、3は独立専門館としての崋山記念館であった。田原城跡、池ノ原公園、小中高を含む武家屋敷一帯、街並み、文化会館周辺文教地区とし、景観の維持充実も提案された。

平成元年、博物館の計画をより具体的にするため田原町博物館構想委員会によって検討が進められた。そこでは2の美術博物館的な構想の中で具体的な室や機能が検討された。

現在の展示室の構成が崋山常設展示室と特別展示室が、企画展示室・研修室棟と広い廊下で分離しているのはそのためで、展示物相互の違和感を解消するための措置であった。

平成に入り、博物館用地（田原城周辺）の敷地の現況測量、用地取得などが進められ、平成3年博物館の設計を発注するため、田原町で初めて設計コンペ（設計競技）での設計者の決定を行った。

基本設計が終了した際に崋山常設展示室、特別展示室、歴史展示室、企画展示室、研修室等の構成をなしていたが、実施設計では、第1期工事として歴史展示室棟を除いた部分を先行事業として実施した。実施設計にあたっては、特に崋山の実物作品を展示・収蔵するため最新の注意が払われた。ケースはエアタイトケース、収蔵庫は二重構造とし、保存環境の影響を最低限とする最新の研究成果を反映させた。これまで渡辺崋山資料の展覧会、貸出業務によって資料の保存についての指導を文化庁・国の博物館からその都度指導をいただいた経験は、開館時に優位に働いたことは言うまでもない。

## 3、田原町博物館開館

社会教育課から博物館建設事務局が独立し、崋山会館の現在は和室となった2階の小さな部屋がその住処となった。その後工事が始まると3階の会議室に移動した。

平成5（一九九三）年4月26日、盛大に開会式が行われた。翌27日から一般開放、5月16日までの会期で開館記念特別展「渡辺崋山とその師友展」が行われた。重文13件（市有品含）、他の指定品6件、重美13件など、開館記念を飾るにふさわしい展覧会であった。しかし他館の作品を借り、作品を展示するのは昭和60年の崋山名作展以来のことである。当時携わった職員もアドバイザー役の嘱託の加藤寛二氏一人。ほとんどノウハウがないなか東京国立博物館、静嘉堂文庫美術館など権威ある館を相手に出品交渉をしたのである。これらの交渉がスムーズにいったのも展覧会監修をしていただいた鈴木進先生（当時東京都庭園美術館館長）をはじめ識者の手厚いバックアップ、先輩方のアドバイスがあったのはいうまでもない。

開館のテープカット
左端　柴田芳三町長　4番目小澤耕一氏　隣鈴木進氏

その作品の取り扱いや対応は今思えば冷や汗ものだった。若手の職員を暖かく見守ってくれた借用先の対応に深く感謝するものである。博物館の建設及び周辺地区の整備は平成6年開催の愛知国体（わかしゃち国体）を意識し、博物館を含めた文教地区の整備は田原町が一つの目標に向かった大事業であった。

9人制バレーボール会場となった田原中学校の周辺道路、また田原城跡周辺の景観整備などが行われた。開館の翌年10月30日、田原中学校体育館で歓迎の集団演技と大会の開始式が行われ、記念の博物館の無料開放が行われ、その日の入館者は1800人にも及び、出入り口付近は入退館の客で満員電車のような状態であった。

開館記念特別展の図録とチケット

平成11（一九九九）年には第2期工事として、収蔵庫2室、展示室1室を増築した。その増築記念事業として「清荒神清澄寺蔵　富岡鉄斎展」を開催した。渡辺崋山中心の展示からの脱却の経緯となる展示となった。同時に民俗資料館が分館扱いとなり、平成15年の赤羽根町との合併によって「田原市博物館」と名称変更、さらに平成17年の渥美町との合併により渥美町郷土資料館が分館として位置づけられ、新しい体制としてスタートした。

## 4、思い出に残る展覧会

本館には崋山の生涯を展示する常設展と導入映像、そして特別展示室での崋山関係資料の作品展示が行われ、記念館的な位置づけとなっている。また特別・企画展では　全国の博物館、所蔵者から貴重な作品・資料を借用し、展示している。展覧会は、作品を集め展観するだけでなく、研究の成果としての質も求められる。

第一期工事完成後のスペースでは制約があり、崋山関係資料以外の展示の広がりは困難であった。しかし増築後は当初の答申通り様々な内容の企画が実現した。

椿椿山展（一九九四年）は、崋山

第一の門人であり、なぜかこれまで単独の展示がなく、当館が初めて企画した展覧会である。作品ばかりでなく関係資料も広く集められ、この作家の研究の基礎資料を提供した。また白井烟嵓展（二〇〇二年）は、すでに何度か展覧会は開かれたが、当館の展示は、崋山椿山の画系が近代化にどのように変容したか、近世から現代につながる南画研究に大きな成果を残した展示であった。「渡辺崋山・椿椿山が描く人物画」（二〇〇五年）・昭和60年以来の大展示「渡辺崋山の神髄」（二〇一八年）、「渡辺小華展」（二〇〇七年）、「福田半香展」（二〇〇六年）など田原市でなければなしえなかった資料・作品が展示され、今後展覧会を開催するにあたっては当館の図録を参照しなければ成り立たない、といった成果を残した意義ある展覧会であった。

しかし、所蔵家の意識や代替わりも著しい昨今、作品の所在の把握を含め「渡辺崋山の神髄」のような展覧会が今後果たしてできるだろうか。これから田原市で育つ子供たちが再び見る機会を設けたい。

展覧会は、収蔵品を中心とする展示、あるテーマを個人・他館から借りてきて行う企画展・特別展がある。後者については、市内では見ることのできない資料・作品に触れる、という点では期待が大きいし、館の職員のやる気も増える展示である。

「ひな祭り展」は渥美郷土資料館で主に行われていたひな祭り展を両館で同時開催という発展をさせ、田原市博物館では市指定文化財の田原凧を加えたひな人形と初凧展として定着している。初凧展ではその年の初凧の展示も行われ、その家族も楽しみにしている。近年では街なかの活性にも一役かっている。

## （1）ふるさとの展示

ふるさとゆかりの画家の作品、歴史の展示は市民に最も見てもらいたい展示である。

「渥美線」（二〇一四年）・「渥美半島の農業の歩みと豊川用水」（二〇一八年）は、ともに田原市の現代への礎を築いた内容で、市民にとってもなじみ深い好企画であった。今の田原を築いていただいた高齢の先輩方が感慨深く観覧していたのが印象的であった。

展示と研究調査の成果である図録

「杉浦明平の世界」（二〇一〇年）・「生誕１００年　杉浦明平の眼」（二〇一三年）・「書聖鈴木翠軒展」（二〇〇九年）・「鈴木翠軒の書」（二〇一六年）「日本ボタニカルアートの巨星　太田洋愛展」（二〇二一年）は全国区であっても、地元でその重要性が浸透していない人たちの展示である。また、「漁夫歌人　糟谷磯丸展」（二〇一一年）、「中原悌二郎と岡田虎二郎」（二〇〇七年）、「挿絵画家　宮川春汀展」（二〇一〇年）も地元を代表する人物として意義深い展示であった。まだまだ展示として未開発であるが、田原市が進めるふるさと教育のコンテンツとして期待が深まる。

## （2）考古資料の展示

考古資料の展示は、伊良湖自然科学博物館、渥美郷土資料館が積極的に進めてきたため、田原町では行われることがなかったが、増築を機に少しづつ機会が増えたものである。多くの国史跡や全国的にも遺跡を抱える田原市では歴史を語る重要なコンテンツと言える。

文化庁の巡回展「発掘された日本列島2001」（二〇〇一年）はその前年の発掘調査によって発見された資料が日本各地から集まった。本展では東京展以外で最も多くの観客動員を実現した。地域展と呼ばれる展示コーナーでは、国指定史跡吉胡貝塚の展示をはじめて行い、その後の吉胡貝塚史跡公園の整備推進に大きな力となった。

「渥美窯　国宝を生んだその美と技」（二〇一五年）は市政10周年事業に伴い開催され、はじめて博物館に国宝を迎え入れた。関連事業のシンポジウムでは全国各地から研究者が集まった。会期中に図録が完売し、増刷したうれしいハプニングもあり、渥美窯の人気ぶりが窺えた。考古学のメッカ、渥美半島の面目躍如たる展覧会であった。

## （3）館と職員の交流によって生まれた展示

「北斎漫画展」（二〇〇二年）・「再発見　日本の書画の楽しみ～暮らしに息づく山形・長谷川コレクション」（二〇一二年）・「渡辺崋山と弟子たち　ー静岡・常葉美術館コレクションによる」（二〇〇四年）・「出光美術館コレクションによる花鳥の美～珠玉の日本・東洋美術」（二〇一二年）など、展覧会・調査研究活動を通じて交流を深めた館の好意によって実現したものである。「向井潤吉展　風土をみつめる旅」（二〇〇八年）・「大橋翠石展　日本一の虎の画家」（二〇〇八年）・「没後50年　松林桂月展」（二〇一三・一四年）について、このような展覧会も館だけの交流だけでなく、学芸員の存在も大きいことを付け加えて置く。

### （4）市民目線の展示

博物館になじみがない、という市民のため、「川崎のぼる展」（二〇一六年）、「日本のアニメーション美術の創造者　山本二三展」（二〇一九年）、「芸能人の多才な美術展」（二〇〇三・二〇〇五年）などを開催している。これらは、館の自主企画ではないものの、市民に博物館で気軽に文化に触れあう機会の提供である。いずれの展覧会も多くの市民をはじめその作家のファンが遠方より駆け付けた。

### 5、貸出及び資料活用

展覧会開催による所蔵品の貸し借りは、館相互の協力強化や交流が生まれ活性化が進む。例えば東京の出光美術館、山形美術館とはその縁で館自慢の収蔵品の名品の展覧会に発展し、学芸員相互の情報交流が図られている。さらに貸し出した作品には、展覧会の印刷物や展示に当館の名前が記されることで市のＰＲにもつながる。

例をあげよう。いわゆる美術・歴史書、教科書などには渡辺崋山筆「一掃百態」寺子屋の場面、椿椿山筆「渡辺崋山像」の掲載依頼があり、市の広報大使にも負けない活躍ぶりである。さらに調査研究を積み重ね、田原市博物館の魅力ある収蔵品を増やしていく必要がある。

### 6、収集活動について

博物館資料の充実は館の魅力でもある。全国的に作品収集費用の確保が困難な時代となった今、当館でも購入活動は縮小し、寄贈に頼っているのが現状である。そのような状況下、崋山の名作である千山万水図（重文　二〇一三年寄贈）、立原翠軒像稿（重美　二〇一八年寄贈）の寄贈があった。以前は借りることすら困難な作品が館に収まるなどと夢にも思わなかった。数奇な運もこれまでの活動の蓄積による所蔵者との信頼関係の賜物と言えよう。

教科書に掲載される一掃百態図

重要文化財　千山万水図

### 7、今後の博物館に期待されること

二〇二一年8月21日から、「渥美半島の歴史」がオープンした。この展示は田原市の歴史トピックスが展示され、ふるさと学習の推進だけでなく、この地域の特性がわかるナショナルセンター的な役割も期待できる。この展示が完成したことによって、当初の田原町博物館のコンセプトが完成したことになる。いわゆる歴史系博物館の固定的な常設展示ではなく、そのコンセプトを維持しながら、研究や発見の新しい内容を盛り込め、いつ見学しても新鮮な情報を提供できる方法に変更した。

特別・企画展示もふるさとを知る地道な展示、また日本の歴史の中でどのように田原市が位置づけられるのか、という視点の展示も必要である。「リト@葉っぱ切り絵 ―1枚の葉っぱで表現する世界―」（二〇二一年）はＳＮＳで作家とつながり、実現した展示である。短期間であったもののＳＮＳから情報が一気に拡散し、多くの人が来館した。これまでの調査研究を積み上げた展覧会とは異なり、デジタル社会を印象付けた。今日的な展示であった新たな発想との利点を生かした活動が必要である。

博物館の使命の一つである研究活動は館の計画に基づき進め、その成果の公表の場として、展覧会・研究紀要の発刊となるのが理想である。公務の研究のみならず、館以外での研究活動も学芸員のスキルアップのためにも積極的に進めていくべきだと思う。館の質と信頼を得るにも研究活動は重要な活動と考える。

本文では普及活動について省略したが、常に新しい情報を市民に提供する活動なので積極的に進める必要がある。なお、ここに記されていない他の活動は年報（ＨＰ公開）に記載されているのでそちらを参照されたい。

博物館活動が充実することによって教育目的の充実だけでなく、人口問題、地域活性などの地域課題解決につながる役割も担っていることを自覚する必要がある。過去を振り返るだけではなく、その過去を生かして次の時代にどうつなげていくか、その道は決して容易ではない。

# 田原市博物館所蔵品から　渡辺崋山筆『客坐掌記（天保九年）』⑭

（図　羅漢）

（図　山水）

*伯甫

**伯甫**　程宗、清、字伯甫、華亭（上海市）人、善山水、花卉。（中・1095）

由田〇〇の
かへし
霜さむきにものこる松むし
へつるし人て

連歌
帥紹巴真蹟

道もたかよひたてたる左訟ニ
おち葉のにわハかさるたるのミ
れる花ありてのミ
如何

はれやらぬ霧や雫と成けらし
墨付十句
長一

（図　松樹）

新〇丙子春日既望

〇〇張秋谷作并集〇宋人詩為題□

**紹巴**　里村紹巴（一五二四～一六〇二）、連歌師、法諱紹巴、号宝珠庵・臨江斎、俗姓松村、里村昌林に師事、里村姓を名乗る、著に「連歌至宝抄」、「明智光秀張行百韻」。（国書人名・②　５３８）

**長一**　未詳。

**既望**　十六日。

# 「偉人物語　渡辺崋山」読書感想文について

公益財団法人崋山会では、郷土の偉人渡辺崋山先生の功績を後世に伝承する事業の一環として、毎年市内小学六年生に対し、「偉人物語　渡辺崋山」の冊子をプレゼントしてまいりました。感想文の募集を行ったところ、二九六点の応募をいただき最終選考において選ばれた二四点の中から優秀賞六点の作品をご紹介させていただきます。

応募いただきました学童の皆さんやご協力をいただきました各学校の先生方に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人崋山会事務局

## 優秀賞

### 「偉人物語　渡辺崋山」を読んで

童浦小学校　六年　山本壱哉

「胸に崋山の　教えをきざみ　どうほの塔に誓い合う」

この童浦小学校の校歌に出てくる「崋山の教え」とは、一体何なんだろうと思っていました。ぼくは、歴史が好きなので、渡辺崋山という名を目にすることはありましたが、どんな人物で、どういう志を持っていたか深くは知りませんでした。そんな時、学校で崋山会の方の話を聞く機会がありました。そこで、より興味を持ち、この本を読むことにしました。

最初に崋山が立派だと思ったのは、まだ登という名だった十二の年におこったことです。登は、との様の行列にぶつかってしまい、名を言うようにせまられますが、言わないので武士たちに痛めつけられます。今のぼくと同じころのことですが、ぼくならこわくて名を言ってしまうだろうと思いました。ぼう力にも負けない登は、強い人だと感じました。また、その行列のかごにのっていたのも、同じ年ごろの若君でした。生まれつきの違いをくやしがるだけでなく、その若君の上に立つような人になりたいと努力する姿は、見習いたいと思いました。そして、くらしが楽ではない中で、勉強にはげむところからも心の強さを感じました。

「みよや春　大地も亨す　地蟲さへ」

この句は、童浦小学校の正門近くにもあります。これは、崋山が出した意見書が通らず、そのくやしい気持ちをよんだ句です。今まで意味はよく分かっていませんでした。しかし、この句に支えられる出来事があり、今では深く心にきざまれています。

ぼくは、この夏休みに自転車で転び、左手首を骨折しました。そのためにバイオリンの発表会に出られなくなりました。一生けん命練習してきたことをぶ台で発表することができず、くやしい気持ちでした。そんな時、崋山の句の意味を知りました。それは、小さな努力を続けていけば、いつか大きな結果につながるということです。なので、ぼくも、今できることをしようと思いました。そして、くさることなく、前向きになろうという気持ちがわいてきました。

崋山が行ったことの中で、一番印象的だったことは、「報民倉」です。報民倉は、今では常識である災害に備えるということです。誰もやったことがないことを考え、実行することは、勇気がいることだと感じました。そして、先を見通す力のある人だと思いました。また、報民倉によって、田原ではきき人で亡くなる人を一人も出さなかったことは、本当にすごいと思いました。

崋山が残した言葉として、「八勿の訓戒」や「商人八訓」といった教えがあります。しかし、ぼくは、それだけが「崋山の教え」ではないと考えました。どんなに苦しくても、悲しくても、折れない志をもった崋山の生き方そのものが、真の「崋山の教え」だと感じました。校歌にもあるように「崋山の教え」を胸に、努力していきたいと思いました。

## 田原の偉人崋山先生から学んだこと

田原中部小学校　六年　伊藤　孝太郎

『見よや春　大地も亨す　地虫さへ』

この句は、田原はんの武士たちが遊びに夢中になって勉強しない者が多くなった時、崋山先生は学問がなくて人の道を知らないからと考え、佐藤一斉先生のところへ通わせてもらえるように願い出ましたが家老には崋山先生たちの考えが通じなかった時に書いた句です。崋山先生が二十六さいの頃作った俳句で『小さな虫でも春が来ればかたい大地をつきぬくように、努力を続ければいつか自分たちにも希望のかなう日が来るはずだ。』という意味です。

この句を読んでぼくは、崋山先生の生き様を表しているように感じました。

ぼくにも努力したけどあきらめようとした経験があります。ぼくは校内のなわとび大会で三重とびに挑戦しようと思いました。でも練習をしても一度もとべなかったのですぐにあきらめようと思いました。そして次の学年で崋山先生の句を思い出し、三重とびに再チャレンジすることにしました。夜おそくまで練習していた時、姉が声をかけてくれて、コツを教えてくれました。それをヒントに自分なりに考え、ひざを曲げて、足を高く上げることが大事だと気づきました。それからたくさん練習を続けてようやく一回とべるようになりました。この時経験したことは今でもわすれません。この経験でぼくは崋山先生から「あきらめない心」を学びました。

崋山先生は、誰にでもやさしく、相手の立場を考えています。天保のききんでは、作物がとれず日本中が苦しんでいるのを知り、心配した先生はお米や麦をためておく報民倉を作りました。上下関係のある時代でしたが先生は、「農民があるからこそ、殿様も何不自由なくぜいたくをなさることができるのであります。」という内容の書きものを出し、農民を大切にされたそうです。常に弱い人の立場に立ち、先を考え行動される先生は、田原の人々からの信らいもあつかったと思います。そして官民一体となって天保の大ききんを乗り切り、田原はんからはうえ死にする人を一人も出さなかった事につながったと思いました。その時の先生の言葉からぼくは「今の自分があるのは、いつもいっしょにいてくれる周りの人たちのおかげ」だということを強く感じました。

先生は、四十九さいという若さで自らの命をたちました。苦しい立場からにげているのではなく、周りの人々の幸せを考え、生がいを閉じた先生にとても心をうたれました。そして先生から学んだ、思いやりの心、あきらめない心、行動力をこれから学校生活に生かしていこうと思いました。

ぼくは、先生がこの田原にいたことをほこりに思い、感謝することをわすれずに、『田原の偉人崋山先生』のように周りの人に恩返しできるよう努力していきたいと思います。

## われらの宝

神戸小学校　六年　小久保　友翔

ぼくが、渡辺崋山先生を知ったのは、六年生になってからでした。それまでは、ここ田原に、こんなにすごくてかっこいい、真心のある人がいたことを知りませんでした。

崋山先生は、田原藩の屋敷で、とても貧しい暮らしをしていました。父親が病気がちだったため高価な薬が必要で、子どもが八人もいたことで、その日を生きるのが精一杯だったようです。それでも崋山先生は、家族の手伝いをしながらも、自分の勉強をしたり、絵を描いたりしていたと知って、ぼくはとてもびっくりしました。ぼくは、自分の勉強や習い事のサッカーをすることで精いっぱいなのに、崋山先生は、家族を支えようと家族のために一生懸命で本当にすごいと思いました。崋山先生は、どれほどの優しい心をもっているのでしょう。ぼくの心の中で、崋山先生の優しい心があたたかく輝き始めました。

崋山先生が二十歳になると、絵の才能が開花し、認められ、家族の暮らしを助けることができるようになりました。崋山先生の日々の努力の積み重ねの成果であり、ぼくもとてもうれしく感じました。崋山先生の「家族を助けたい」という思いが努力の味方をしてくれたのかもしれません。田原藩の武士たちはその後、遊びに夢中で勉強をしなくなりますが、崋山先生は違いました。何とかして暮らしをよくしようと、勉強に励みました。「見よや春　大地も亨す地虫さへ」これは、小さな虫でも、春がくると、固い大地を突き抜くように努力を続ければ、いつか自分たちにも希望の叶う日が来るはずだという意味です。この意味を知ったとき、心のおくがぐっとなりました。

崋山先生が三十二歳の頃、お父さんの病気が悪化し、必死に看病しましたが、お父さんは亡くなってしまいました。それまで自分のことよりも家族を大切にし、家族のためにがんばってきた崋山先生は、相当悲しかったと思います。僕だったら、立ち直るのにとても時間がかかると思います。その後も田原藩の人や田原の市民と共に田原をよりよい所にし

ていこうと努力しました。しかし、江戸幕府が押し寄せてきて、自分自身の体も弱くなり、心も体もぼろぼろな状態だったと思います。崋山先生は、四十九歳という若さで自らの命を絶ってしまいました。

崋山先生は、最後の最後まで、人のために生きていたと思います。田原藩の仲間に迷惑をかけないようにと考えて、命を絶ったのかもしれません。どんなに苦しく辛い状況であっても、自分のことよりも周りの人を思いやり、人のために努力ができる崋山先生を、僕は尊敬します。渡邉崋山が生きた証は、田原の宝だと思います。昔と今は時代が違うけれど、僕も崋山先生のように周りの人を大切にし、感謝を忘れず、真心をもって、友達と助け合いながら、毎日を過ごしていきます。

## 田原の英ゆう

高松小学校　六年　大　羽　尊　斗

今回、偉人物語「渡辺崋山」を読み、初めて崋山がどんな人なのかを知ることができた。読み終わり、すごい人だったんだと感じた。

崋山は田原藩の家老になったが、小さい時はとても貧しく、苦労して育ったそうだ。そして、病気のお父さんの看病をしながら勉強するほど、すごい努力家だ。貧しさや忙しさを言い訳にせず、日々の努力を重ね、その結果、偉人と言われる人になったのだと思う。ぼくは、崋山と正反対で、つらいことや面どうなことがあると、すぐにあきらめたり、親に助けてもらおうとしたりする。崋山の生がいを知り、崋山の生き方はかっこいいな、崋山のように一つ一つのことをこつこつ取り組んでやりとげられる人になりたいと思った。

ぼくが一番心に残ったことは、崋山が「報民倉」を建てたことだ。崋山の提案を殿様が賛成してくれたおかげで、この倉にはたくさんの穀物がたまった。報民倉が完成した翌年、日本中で大ききんとなった。その時、崋山は「凶荒心得書」という書き物を送った。それには、農民は国の基であり、農民に生かしてもらっているということを忘れず、殿様自ら動きなさいと、殿様に進言している。これにはとてもおどろいた。殿様に向かって物を申せる崋山の堂々たる態度やかしこさ、何が大事なのかを見極める判断力にしょうげきを受けた。崋山の指示に従い、身分に関係なくみんなが力を合わせて助け合ったおかげで、田原藩ではうえ死にする人が一人もいなかったようだ。

崋山は、貧しい家で育ったため、人が困っている時には自分のことのように同情し、助けた。ぼくは、読み進めるうちになみだが出てきた。見返りを求めず、素直に人のために働く生き様に感動した。ぼくは自分のことで精一ぱいだ。今年、児童会役員になったけれど、なかなか周りのために動いたり、気づかいの心をもって人に接したりすることができていない。つい、自分の楽しみを優先させてしまう。やっぱり崋山はかっこういいなと思う。

崋山はとても忙しい生活だったはずなのに、その中でもずっと絵を描き続けた。また、外国についてすすんで勉強した。蘭学を学んだ崋山は、無実の罪でろうに入れられることになった。日本の未来を見すえ、どんな対策が必要かを考えて行動しているのに、なんてひどい時代だとおこれてきた。しかも、心の支えだった絵描きも、罪人のくせに絵を売って金もうけしているとゆがんだ見方をされ、そのせいで殿様にも迷惑をかけてしまうとなやみ、自害してしまった。崋山をおとしいれる悪事がなかったら、もっと多くのすばらしい絵を残し、日本のために働いたにちがいない。本当に残念でくやしい。

今、ぼくは野球をがんばっている。崋山が絵の勉強を続けたように、ぼくも続けていきたい。そして、児童会役員として、みんなのために、学校のために何をしたらいいのかを考え、助けられる人になりたい。

## 偉人物語　渡辺崋山を読んで

田原中部小学校　六年　石　黒　愛　理

わたしは、偉人物語　渡辺崋山先生の本を読んで、崋山先生はやっぱりすごい人だなと思いました。わたし達は崋山劇を見たり、五年生の時の夢育活動で崋山先生について、調べたりしたけど、この本を読んで、まだまだ知らないこともあってとても興味深かったです。

わたしが崋山先生のことをすごいと思った理由は三つあります。まず一つ目は、崋山先生が子どもの時のことです。家が貧しいときに、どうにかしてお父さんとお母さんを助けてあげたいという崋山先生の優しい心があったからです。わたしたちとあまり年も変わらないころに家族を支えていこうとすることはとても立派だし、簡単なことではなかったと思います。それなのに崋山先生は、苦しいこと悲しいことにあうごとにふるい立って、必ず立派な人になって、家の者を幸せにしてやろうと思ったことも心が強い人だなと思いました。わたしなら、一つの悲しいことにあうごとに心が折れて、なかなか立ち直れないし、自分のことで精一杯で、家族を幸せにすることまで手が回らないと思います。だか

ら、そんな崋山先生のような心の強さを持ちたいと思います。

二つ目は、天保のききんのときです。気候が不安定なため、米や野菜が採れなく日本中が困っているときに崋山先生の建てた報民倉が人々を救いました。これがなければ多くの人が死んでしまっていたかもしれないと思うと、今ここにいられるのは崋山先生のおかげかもしれないということです。わたしの家は報民倉があった場所のすぐ近くですが、こんなにも身近な場所に崋山先生の業績がわかるものがあったなんて、誇らしいことです。

三つ目は、崋山先生が書いた心構えの言葉です。例えば「農民があるからこそ殿様があるので、殿様があるから農民があるのではありません。」という言葉です。崋山先生のいうことは、農民や町人によって国が成り立っていくのだという前向きで進んだ考えだと思いました。この考え方は、わたし達が六年生が社会科で学んだ今の日本の在り方に似ています。江戸時代にありながら、このような目線を持っていた人だというところがすごいなと思いました。

崋山先生の生き方には、見ならうべきことがたくさんあります。例えば、崋山先生は、全てのことを進んで実行し、長く努力を続けて物事をやりとげました。わたしは、一つでも長く努力し続け、やりとげられるような人になりたいと思いました。

## 「偉人物語　渡辺崋山を読んで」

田原東部小学校　六年　大　羽　望　未

私は、渡辺崋山先生について知っていたことは、田原の町中にあるあさりせんべいを売っている店の紙袋に描かれている絵が崋山先生のものだということだけでした。けれども今回、崋山先生の物語を読んで分かったことがいくつかありました。

まず一つ目は、崋山先生は生まれつきおとなしくて、怒ったり人に意地悪をしなかったということを知りました。私は四つ下の妹に怒ったり意地悪をしてしまったりして、母によく怒られるので、崋山先生はがまん強い人なのかなと思いました。一人で好きな絵を地面に描いていたそうで、ぼんやりしているようで、なかなか注意深く描いていたので絵がとても上手なのかなと思いました。

二つ目は、崋山先生の俳句

「見よや春　大地も亨す　地虫さへ」

です。これは「小さな虫でも春が来れば固い大地を突き抜くように、努力を続ければいつか自分達にも希望の叶う日が来るはずだ」という意味だそうです。崋山先生の育った家は雨の日にさすかさを買うこともできないほどの貧ぼうでした。「どうかしてお父さんやお母さんを助けてあげたい。何か自分でお金をもうけるような仕事はないか」と毎日考えて何事にも熱心に取り組み勉強をしたので、周りの人に認められて、崋山先生と呼ばれるようになり、立派な武士としてお屋敷勤めができるようになりました。崋山先生が努力し続けたことは、とても素晴らしいと思いました。

そして三つ目に知ったことは、田原に「報民倉」という倉を作ったことです。困った時にみんなの暮らしを救うための倉だそうです。崋山先生が生きていた時代は、政治が長い間乱れていて、気候も不安定で米や野菜が取れず、日本中が困っていました。けれども、「報民倉」のおかげで田原に大ききんが起きても、飢え死にする人は一人もいませんでした。農業などの産業を盛り上げようと色々な取り組みを行う事で殿様にも信用されていたのだろうなぁと思いました。とても優しくて人が困っていると、自分のことのように考えていた崋山先生。自分の着物を脱いで人にあげ、自分はぼろぼろの着物を着ていても平気でした。ききんの時はご飯を減らし、その米を困っている人に与えていたことも知りました。

私は六年生になり、児童会の仕事をしています。「どうしたら、いろいろな学年の子たちと仲良く遊べるのか」「どうしたら、大きな声であいさつができるようになるのか」と話し合い、学校が明るく楽しくなったらいいなと考えて企画をしています。なかなか上手く話ができなかったり、伝わらなくて困ってしまうことがありました。けれど崋山先生の物語を読み、いつも先のことを思いながら「人の役に立つことは何か?」と考えるようになりました。得意な絵を描き続けながら、他の人と違って、出来にくいことをやり遂げた崋山先生のように、私も何事もあきらめずに長く努力を続けられる人になりたいと思います。

**最終選考に選ばれた方々**

新屋希空　河邉蒼夏　田中晴奈
松下大遥　眞木汰理　山田琉矢
木下桃代　林　理愛　安田初花
河邉真由子　宮本朱莉　杉原斡樹
井本優衣香　浜田輝来　杉浦　豪
杉浦遼栄　藤村遥菜　永井新大

（受賞された方は除く）

# 公益財団法人崋山会 田原市博物館 からご案内

## 池ノ原会館立礼席のご案内

日頃は、田原市池ノ原会館をご利用いただきありがとうございます。

十月一日から諸材料費の高騰に伴い、立礼席の料金を一服四百円（お菓子付）に改定させていただきました。皆さまには、ご負担やご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、何卒ご理解を賜りますようお願い申し上げます。

立礼席とは、四季折々の風を感じながら椅子に座ってお菓子と抹茶をいただける茶席です。和の空間で、気軽に抹茶をお楽しみいただけますので、皆様のご利用をお待ちしております。

## 田原市博物館展覧会のご案内

～十一月二十七日（日）

企画展

### 海から広がる渥美半島展

三方を海に囲まれた渥美半島に生きた人々は、海の恵みを生かした生活を営むとともに、交流や交易の多くは海を通して行ってきました。長い歴史から現代までに至る、我々と海との関わりの歴史を見ていきます。

地引網のようす

**同時開催：文人画家が描く水**

渡辺崋山をはじめとする文人たちが描いた山水画などを展示します。文人たちが描く水の表現を堪能下さい。

**十二月三日（土）～令和五年二月五日（日）**

### 文人画家が描く、めでたいもの

新年を迎えるこの時期。渡辺崋山をはじめ、文人画が描くめでたいもの、縁起が良いものをご紹介します。

※企画展示室は工事のため閉室します。

渡辺崋山・渡辺小華筆「福禄寿図」

**二月十一日（土・祝）～四月九日（日）**

### ひな人形と初凧展

田原の旧家に伝わったひな人形や田原凧保存会作成の初凧を展示。

### 渥美半島に残る家康の足跡

一五六六年、徳川家康は三河国の平定を果たしました。田原城は、その前年に攻略されました。この展示では、渥美半島に残る家康の足跡を巡ります。

**同時開催：渡辺崋山と近代の崋椿系画家たち**

江戸時代後期を生きた渡辺崋山や椿椿山。この二人の作品に強く影響を受けた近代画家たちの作品を展示します。

**観覧料**

**企画展**

**海から広がる渥美半島展**

一　般　四〇〇円（三二〇円）
小中学生　二〇〇円（一六〇円）

**企画展以外**

一　般　三一〇円（二四〇円）
小中学生　一五〇円（一二〇円）

（　）内は二十人以上の団体料金

東三河在住・在学の小中学生は、ほの国こどもパスポートをご利用ください（呈示により無料入館）。

**休館**　毎週月曜日（祝日の場合はその翌日）、展示替日、十二月二十八日～一月四日

※崋山会報ご希望の方は崋山会館・田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 令和五年四月十一日

崋山会報　第四十九号
令和四年十一月十一日発行
編集発行　公益財団法人崋山会
理事長　鈴木　愿
常務理事　林　勇夫
事務局長　大根義久
〒四四一―三四二一
愛知県田原市田原町巴江一二の一
TEL〇五三一・二二・一七〇〇
FAX〇五三一・二二・一七〇一
編集協力
田原市博物館
崋山・史学研究会
会長　小林一弘